寓琴藏角

其角文集類柑子 中

小柑子 追悼

中

特別
へ5
6088
2

特
A5
6088
2.

勝田芳

帝國圖書館藏

類科文集中

御玄猪

細川家の茶屋京都の御内御ふつきて
のりしに　近衛左大臣基凞公御茶く
めしてはなつ御菓子をりかり
碁石形にて色ゆ深くる餅を作り
せゝとさゝやうは此餅を子の日
なりし宸宴依物のあるりしいき
おすもつてはなを王道の興癖と
てしは國栖肢赤の養十りり朝日氷魚と
りは魚を公御ゝ給もるものの旧例その
名のゝ変る丹波のおせの郡久御庄

54-8583

より御玄猪　餅の名し　ゆく末をるす内蔵
寮より是を以て昔をしのぶ御子御
心くしとやゆかりるまゝに感し給り
涙をつゝむ袖の内ゝ餅をこやうて
懐中仕りを御恭拭具すへくかゝるゆる
御掛物極の一字の墨蹟し是い道風の大
極殿をゝくの〳〵しく下書をして仕こ侍り
来れる式大と殿との其中をとり用い
ゆせめいてむ御重賞の珍奇のよりか
やうの名しい御中宝蔵よりとりや
れ家をハおつまゝふ物し後成ての古今
全部も御書る極よ物学ゝ

三乃蓮

江州田中村ゝ田中郡九まつゝいる農夫
くもゝを好ゝ千もと四色の雲葉を
植つゝ池をゝ作ゝ物をゝ浮論をゝ
くるゝ小船ようんて心のゝ宿りふく稲
葉の沢ゝようう子世乃文弘もゝに
あゝ〳〵きゝ人の名のゝ蓮ゝ一とせ乃
文ゝ乃ゝ〳〵ゝ咲くゝ尚るゝ乃ゝけを
愛蓮の詞いゝ乃ゝ〳〵ゝ乃ゝ〳〵ゝ
心のゝ名ゝ乃ゝ〳〵ゝ書ゝ
一茎ゝ七論の花を　天子の蓮
一茎ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ乃ゝ　土乃茎

一堂一倫ハ法をもとゝして百姓乃道と
あ人真名國あおのく吐しもれて法人
けむを物ゝこの寺ある所ゝ天人の教道
かさんも天降まおに心ひてありうき
世あしおいそやしむへ一郷ゝ栄へ
くらものし七徳ハ天子の陽し三徳ハ
武士の嗜一蓮ハ勸れろう菩提乃ゝね
なりと念佛三昧の心ゝしはうゝに浄
泥あておに邪觸乃胸を洗へ法ゝ
鬼永ゝこの霊菜の異香を惜めり

謡乃説　ゆゑ　うゝふ　ゝと八小町
羽衣　實盛　ゆゑ　とゝの松ひゝるを見行り
熊坂　祝言　とゝの松ひゝるを見行り
昔より讃あやまれる所文字の巨釈を云
人あゝとしゝゝ愚意を加へて志ゝれ行り
△ゝの名も月乃いろ人ゝ
三五夜中のゝゝ
月のゝゝ人ゝ文と文と行草のゝつを
字ゝ所やるあゝし月の玄古ゝ八たゝ
ゝゝゝるお義もあゝ
△おのれゝ日本一の功のもゝ
ゝんてゝうすゝゝて

功の者と組打すると力者をなぶ笑
へる初し打テウの色よりあをくてらくら
らんでうつと書くるとさらんでうつと
らくへるらくらんでうつといふ説ハまろし

△こゝも旅雁のあるといる

小斗の星のつもりもの

小斗星前に旅雁横ヲ経角堂ハ淪蔵なり
北辰を柱のごとくとるし弘誓真如海乃
文よりり城南淀河乃運送回船のるよ
常灯明をくやけ其光心よあるりて
△くもりおろ経角堂ハられるや
金森宗和上洛のとき清水よりあるいてこの

所竜の倒れて苔おゆれを寺僧よ所
ゆゝ吾妻の奇物ゝてゝ芭蕉
即座ゑ居られる

△うゝふやけのとろゝ
烏賊善知鳥ともみ不審の字し東奥の
商人船よて松前へ渡る人のいつるハ蝦夷
近ち村里ゆゝしの揃所ゝも呼ゑ多の笛
なゝの祝婚吹ゑ合奏ゝのやうよ形
老を似せて舞ゑをちてうゝふと
よふしち追の心ゑ心あゝてれをたゝし立る
列士のものゝやけゝとゝ云しうゝふハ親
やけゝハゑまて列士狩ゑ出るゑひすた

笠ヨリ外れ蓑ヨリ洩れ雨ハ降リ来リ卒土の涙ハ庚を伐スル
鳥類ハ孤子の愛情ハ深く血の涙ハ
ハケシクして命を惜ムト庚狩の其心ハ
因果を説テ殺生を戒メタリ
△一ヨリ五ニ至ル四ニ至ル七ニ至ル八夜九夜
ハ夜ハ一與二与三与ハ与スルて助字ハ
五六の字アラハるを分別して楫の繰り
百とつゝめる数を合セタリ
一ヨ二ヨ三ヨ四ヨ是を四と立テ
七ヨ四七廿八八ヨ四八卅二九ヨ四九卅六都合
百の数なり彩の玉水とゝと指わるし

あらしやうのひんとて
心よそくを引けるら
墨絵本の假名の洒落なるあるは
あゝやうや嗚呼危うや引んと書
きるを写しくて牽肉をしるひる
文句とアラハり章句のハ
わ〳〵ハ遊楽同雪〳〵るうゆあ十悪八邪の
悔のしれを八声去色ハて孤ひ流す和
うゝひ消ハ和句字義ハかゝりて
面白く猛ひあるし感應なるし
図柄のうそやたゝくを焼ハ
の文句もやのやりを後悔ハ

五句　半面美印

臣拓うさく飛石の高
盛久の長居いとれう氣をつけて
象のうけ色をうく敵山
伊東きとうふ那く芦賣
泥亀焼とり松茸の甲
山田吉信郎の男をすかる成
双六の筒うく直る手を拾り
玉藻り智恵も大きうひし
五句　五字印

界隈の寺い実つて大坊場
切レをうく又る伯子う新

家ゝ乃名所
物ゝ俵乃ハ乃信濃をかとりゝ
はぐりゝ乃ゝ巴ほれ中とても遊るま
しゝ世中しゝれし心のゝ処をうぐへて
碁盤の友をけるふる五十のて四谷を
ふりといつる崩るゝ怠りと奥羽へ
かゝ小商人の松乃格好をきゝ族
塵ゝつゝ玉をいろふ心ゝうくしゝり
いぐとて誘いれしを矢菊のゝを同
てゝりすもゝ知をいとすひゝすゝ富
ゝ者の掘ゝ乃ゝうくゝく日ゝ送

はも有良基公の序記にも直世を表
さんと心を漫るを名利と絆つる者
を形骸の対仕りん窮のもと猫よ
りも狂乱の犯乃
至極しとうゝせねへるふ氣なる
こゝは國の数六十六部の法華経
納めゝる僧あり名なる鷲山の末に心
のあるをりけて仏を忘れ一日燕語
しけるハ即当地の栄くへて物は
東叡山中堂ハ日のかゝ二つの彩をうつ
ゝる霊場なれを花のうゝ者の声

まても日枝よりも低ところ心地よ
かゝ日光ハ荘厳れ遠と池ち廣
沢よりうゝく遠樹高閣風京涌いで
ゝゝやゝ深川隅田川めくす名ふ
流れるまと加賀桂よりハ賤くて肩
ちゝゝり山並もかゝとゝ彩り目黒ハ
おゝり山坂かもゝゝれとゝて水
遠し嵯峨ハ山ゝて淋ゝ世風情かり
曹司谷ハ桂の床立も昔あゝ寺もよ
三光かとうゝ人世名のうゝ彩伏徒の
床もゝゝしくいあれど鶯のよゝ仲

山よりこの深の寺元改めて造りたる
住くん法恵とぞいはれしものと
王子ハ瀧落一斤の水ふ曲水のごとくなれ
ばかるる舟ふてはくるはしはれもろ
ど貴ふ菊をあまたうつしの家居ハ
茶園を所ごとにて花をそうつる比成
ふ宇治の橋舟のごとし目を流ふへき
路山もたり興聖寺平等院ふつけても
初をのこれたりし護国寺ふ堂新る
ふて緑樹陰を重ね町並ごとく
りけ作り吉理ふ似て一目千本乃言葉

ゆりのも思ひやりしおやるも流れふく
て口可愛さ乃あるし猫乃ちり
うれもし源川の例ハ東南ふ坂さ安房
上総の山とを凡帆ふつこ上りり地上乃
塔ふ増上寺の華を列ねて海ふ
彩とりる形容杜詩韓文をあざり
かの住吉をうつしある佃島もむ
岸の姫松のすくちさりの橋のあと
可うびに沢山の蛍のゆやく燈かの
りて公家達のこすおせのふ序り
おすに似もよるん宰府ハ行ちまるる

はるゝて深川の色ゝ合羽ずりやゝ思河
乃ほとゝぎす芭蕉翁ゆかむ都府楼観音寺
唐繪とゆゝしんよ四ツ目の橋なる報
恩寺の麓乃白地なるで町繪の屏風
立てんやうし市立うしく梅紅葉ちるこ
月の末の霞ゆすりて回廊よ延をまよ
くるはうり野よハ心もとゝるゝと一ツ
くゝ疵物のしゝり無疵の名作を快
霽の富士ゆゝて三千世界をかゝげり
といつるふ我もまゆげとして天ゆ乃ゆる
地かれて三蔵法師の座りしてゝ左も

見るふけふ心の止ゝ目ゆ警うゝ蓬葉の
山とゝてゝいゝりゆゝ世ゆ者ゝ
と勝槩の奇絶をつくされる分限乃
殿つくりのうち表ハしゝりは素ゝく
遠石両工乃物数奇をゆるいせゆゝ庭山
四川とゆゝ国石土作殿のゝ材時津とゝく
蘇鉄家と領分名木をゆつゝ畏禽霊
獣をかひたゝちて霊臺霊沼の楽ゝ
鼓吹の色外くもれ宮仙蓬のゝく秣
刈加ゝ殿の掃除の者大酒ゆせゝ酔て
かゝくもゝゝゝゝ鉢をもとりてゝの山ゆ

見るに三日粮をつゝみてあなたゆるの道
千丈の瀧乃白玉落しかけて辛崎の松よ
兎倉杉いまでうる所松島塩釜なんの姿
底かくれの里蚌満珠寺をこえて寄る
見香爐峯乃雪と見しはかへりて白い鷺鷥が
千羽ゝ連てうる汀廬山の雨が灯籠一ツ
あそしまでおすまね杉むらの瑠山をば
老貴の森と見たやしを白露舟頂かり
毛こぼして百梅に花かゝしる柳竹林
の虎をつかける嵐もありといもし
虎の生皮をうるとて珊瑚の瞳を入り

金の瓦をといでゞうづく帰るかしいうちハ
孔雀のひなが家しら芭蕉のかけは帰
何も桜五百本お柴五百本た右に錦の
まき秋をかうそへ高塲何も標乃色しに
そいへうる張ゑ埒ゆいくてある所大
追物しかへるあとうやくちなしの細次
ぎこ角やうに木幡の山に心つけうるお
こりし桐島の千入なる深井の山直の
卧水の清き流も昼夜をすてゝ流こゝし
かの鸚鵡とかよふ公乞うり南天乃色庭
何ゝ迄かりしそり木猴さうりの庭月の

そうれもうふめてくうりとる菊作り
吹上のうちり杜丹の媒と成り菊の奴
とものうるものあの京よりもいと鶏鶏
技持とる辻番釈(コト)きれる大領玉川の
蛍をいつの世史とものいとうこと根合
叫合わきとうほうり玉筆きかをか
らしいと貝変るた雨よりもいとて月とそれ
との光をうすめ瓦をあの所家
けく苔ものしして昔をあの乱草を
掃つる蛙楽をもしする隠居舟ち
なるの女中まそして泉水こうの粧いを餅

れり大井の遥遥きの山のうつ日言
夜をかるめてい松ものして尾上よりもあ
搗図宝の落ものつうり裏鳴谷の巻の
牛をもし文あるの(井)綛をうきし羊を
與しいの内たの巾(カワリモノ)をはのび居士衣り
錫をいしてと白兎の玉を確ら先
黄鸝の柱(コトナ)をゆうちうり名麿の猟
ものはし奇大の山家を守うせうり
八方と薄をのつう鄙の住居をやつし
ものし新し秋なきもる業五十三次乃
翼粮をはのけ蹄鉄の音うし

す山関の称さのすち男竹の俗戸ケ
間わうとを名のうせかてつうちち
うれうら沢うるとよい飯をほうし
柴の箸ちり拾くて椎の葉の清き耽
て菓樹心の海〳〵もぞちり瓶田り
沓をゆうして起の已り海〳〵車る
かまいすうめて柳のちうれうる所
ううのて笠あ枝よ清れをむすあよ
すぐふし此清水所茶お献せ迷
てより世人水を考とい〳〵て心新禪
師の記百景玄龍ぐうゆ有める額て

ちうゆうるも何〳〵隠元言葉の清筵
ようてみける孤顔川よりあ〳〵ひ〳〵人
養老よりやける形もよ名ちよ
蹄をひ〳〵脛をちうめて塘お登れ
て河を西仏ち生れ〳〵ちう
人のうう〳〵を扇ようわ拳といの酒
のみうわして熟門の雪風を海めくま
林学士よ硯を拾ち〳〵雪ゆて花乃
ちちの和ち〳〵を求ち〳〵り琴琵琶
の検校法師風のち〳〵をういせい尺八
一節切のち〳〵るゆ門言棚ゆちち

[illegible]山の鹿必ずなり
笑ひくし梟かすーすると猿のこさけして
憎まるし蠅おくてさ[illegible]毒おし
[illegible]ふ長寄一日の花をさしつ[illegible]
る蹄よ胡蝶しつとつてやまの
[illegible]
大家みてこ[illegible]所名所元奴[illegible]土
よおかやゆゆゆん三都の賦も笑
[illegible]
説のこされて[illegible]所[illegible]何
[illegible]

小乃窓　一章下

塗壺のうしろふ一株立　嵐雪

[illegible]や柳乃枝[illegible]
茨(サネ)のかこ[illegible]豆を乾[illegible]　百里
お服とる尼ふ祐をとられて　晋子
正宗ーやと[illegible]
シパくと便おく[illegible]中益田　雪
足半をとて袖さ[illegible]ふ雪　星
水鹿をたする蛙(ケロッテ)も八重葉　子
琴乃師匠を[illegible]　雪
[illegible]国橋を流[illegible]
ちすりに[illegible]人の迹

う白ゐ力車乃わすれ草　星子
雞頭二本　為滝子　物
餅屋といへる人も有　衣の名角力　雪
流るゝもしらぬ居待立待　星
七夕の乳房あらそふ蝸牛　子
紗の金ちりもかされ衣　雪
巴ゆゝ横ふ大原乃花ちり　巴
先孝和尚と人のおやぢ　子
蝿引ふるまいちする巴し　巴
千住へ下る掛もなる　雪
物狂ひ亭主ふ名のちや　子
かる紀念の柏　星

何ふすゝ烟のたちのぼる　雪
丈おなの指やたちそ橋本　子
乃ふ菅麥子の花ハもろ　星
舌うちもちて何うむ虫　雪
月ちて鼻洗袋　初ちゝさ　子
乳母とよしの北寸　渠ゝ塔梅　巴
宗祇の上乃名ゐ　雪
股をしし今　中山　子
鼻墮て彫の住居の佛　さを　雪
洗ひ河原ふ二番　雞ゝな　星
引粥ふ赤ちをのこす　和　子
瘤乃てちゝ　老てちゝ　雪

番町の朱子とゝやして花ひらる
四ツ乃日影の一乃玉山吹　里

小窓後園　二

葉ゑ乃間ゆ出たる一西仏弁　潘川
落色月乃ひかりみなるゝて　堤亭
御用木一ゝ奈弁初沙子　野徑
ものいたゝきすこゝ頬切　暁白
盞ゝつゆふすりゝ膝乃上　吾ゝ
トモ四五間ハやゝれ一やう一　東
ウ
ゝ忘ゝ小条殿乃紋なるゝ
畫ゝ落涙ハ名残乃者　川

くれゝ井の心のゝゝて仏ゝ虹　徑
うハ妙空ゝる悪ハ木夾子　白
窮の鶯ゝゝるゝゝゝかゝ　亭
ゝて原ゝ月ゝ大般若粥　る
足乃毛ゝ人ゝ　川
稲葉ゝ末ゝ　東
ゝゝハ絶の送ゝ乃酒停止　亭
ゝゝゝゝ書て放す盗人　徑
服ゝゝゝゝ　る
九の戸ゝ　川
かゝゝゝ俊奈坊のゝびすゝ　東
ゝて集欲矣止千万　亭

いたてふ一てふ伊勢れを　徑
額ぬらせて夢ぬうつそ　る
回船乃腹へよせ来る波　川
秋のゝ〳〵ふかい色の戸　亭
はぎ乃暮望の月もり宮れく　る
余ゝ〳〵ふ江戸乃家　徑
取祭将鬼も袁入をつけて　東
川見分地水上を　川
中馬る曲印のうちや普施戻り　亭
伊の難　迦葉へ拙るいとうら　る
薮乃色苔茶の磨古屋てらく　川
拂ゝ〳〵しらい人ゝ喚れを　徑

川音も吼やゝ加茂乃犬　東
内み寝ぬ夜ハ花の松りを　亭
つゝ〳〵雲の孫を鍔屋し　る
氣風祇毛ゝもゝ里新糸　白

萩遊ひ　三章下
三田山戸ゝ　晉子

日盛を市傘とやせ荻ゝ汗
袖の車てゝる板乃る　翌悠
厚の部面のうつきゝ肩入を　青流
後乃融吉のゝる十六夜　入松
ゝの袖を交く卯月をゝり　貞化

氷柱くと踏わもらし　常役
牛蒡の莖なあつ朝霜　悠
三水ほいくてて橋ま涼物　佐
耳驕のほハいるむと西ひくる　松
廿中なひとり殿様まいる　悠
山村り稲荷ハ社　乗ちて　る
硯　乗ちまてちふ九六句　脇
松前ま白乾ホシのうひあうかう　佐
ハ小進てを八十の賀を　る
仲人のまくもしろ拍山ハ風　松
花生の墨ま江戸町　役
花生の墨ま　流

中ハ料理ちきの義並
かやのみこつぶと物を春昏ハ
ちつ世涼のの所の　瓦ヶ口
ハれくと唐茶　干ら　帙のくへ
製法　糞エ　壇のくしを
昼ハ　を　ちをちる　
庶ハ迎いを用心ち
ハの事次庶ハ涼世ハ　所
乾ハくく　躍ふやめ
篭ともふ拾りくまかほつふ
鉦の弦とつて音ちの庵
胡麻塩ふ白きちを社ま

作　る　悠　役　流　松　役　る　作　松　役　悠

走りくの相ふる場くうする　海松
住所もとめうるいはに二隠居　松
本をあらまくよく室のるうれ　帆
角既巾角るうるをもかるて　流
大内山乃　密ひ麻せ石を兼　悠
初寅や主くのうるれやする　子
うとうに所千もけとうさるに　役

穂の灯　四　章下

待友彩酌　格枝
氷凝るを推も敲も走つる巻
聖くひとり柔み小便　晉子

野狐の尾乃尾を吾学しを　風葉
小昼乃箸も土塊るけうく　鶏士
百豊よ笠ハあくしの仰　虎笄
城を六うつ鶏の行くる　枝
ふるふ障るゆたくる鉋屑　子
箱所ひうけるる蛸乃切手　東
お應ウ鈴木院い栖ひるせ　士
卯塔乃乃つるけうやる　笄
るよ入一等盤でるう松友　枝
くくく袖の恋ハ舵の可　士
附るしと下されひしひよも　子
冠者よおくて光ある屋　東

鉄肌や月を沙乃史寸鏡　竺士
蕉門の仕切りて舟の着　士
あれる人に験氣を問て　京
祝乃枕卯ふうふう絃　子
紙屋色色芹あり袖乃面　笑
納屋のそらひようつくりの面　枝
洛十の家老班花ちつきて　士
あぶない岡をつなぐ芝　京
飴引乃宮根の宿なるし　子
柳をうすあるも小屋の者うり　笑
かつてい蛸くすくく縄結かけ　枝
金拂ぬすむ指はまかれ　子

押賣の祇園守ふ松の月　士
けんくいな付て巳の　重勝　京
驛長り客寸の酒乃ふすり水　笑
足弱さうすする柱ふもふ　枝
洞布のこれを植ばさらすく　子
地震このくさ見しを記ふき　士
白川の歯ふ衣ふせを門の婆　笑
入る筆ふうり京中乃竈　京
うつりを多野ふ中へうすり索　枝
何班ふくやうハ蒟蒻　笑
竟音く下篭投ん舩はすり　京
あらく柴をおもけハ夏　士

白鳥はみな河つゝの山又は
こけらもの木形切くむ　枝
笠を稲帯みとすむもをよ生て　笠
一口乃原を鬼怪相談　る
浪分を松山くの黙阿弥　士
ゝゝゝれ大刀弾りゝ石芳　枝
霄巴り伏ゑゝをゝる名のゝ　葉
安部の御とかゝゝの粕　士
目ゝゝて八日の籃の言ふゝ　枝
心の板を籠ゝ籠ゝ　笠
丁丸ゝつんか商人花のゝけ　葉
難見てゝゝす外郭の義　る

神祭十月月月
岡中のつゝ祭ある　晋子
年の屁を折ゝ寸やゝ月同
花ゝゝれゝ一重口ゝ　百里
表具屋の珠数ゝゝ書ゝて　朝叟
地ゝゝ乃時鶯ゝ鳴ゝ　新真
潘（ミツ）ゝ深るゝ中ゝの元結抜　嵐雪
帆をゝむ橋やゝゝの際　堤亭
ゝ桜の角久字ゝる十三夜　南盛
梳懐い庶の角ゝつゝ　全阿
売ゝゝ仕衣（キ）せゝるゝハ蒲の中　真
ゝ月ゝ泪日ゝ大大　る

と捧ものしるしあるを喇うち　里
うらに三羽の鶴い歴く　盛
野蒐の頃さもー森乃色　亭
二日醉ーみもーらいの岡　豊
しめの傘ゆむ身はなて　阿
とて情を質ゆうとる　宮
用よいきつつ寅の紅　真
愛ハきの中小性うか　巳
一袋　詰の具をとりて　望
ちう盃　う先幼乃　子
月花もきし鞘鼓のおすて　雪
東海乃ちて初ものを雀とハ　亭

雪ふて病氣ゆーみにおヤス　巳
田の告りのゆ毛ゆ柿の脱殼　真
ふべけの　ちんひん餅を　豊
ゆ訂もての毛めい便　雪
茨木の卯月のあを竈　子
黄蘗を乳ゆむごいゆちう　盛
ゆ形舟三日つけて樂配不　玄
お芋もう人も老乃尼ゆ　阿
ゆけてもりゆけるゆ町　星
所六仕ゆてよゆの通ゆ　亭
月ふふ芝来ゆも牛玉買　雪
文治の秋ゆ判官を泣　豊

[illegible]もんまつへを一かを　典子
うゝんを磨て足弁戴く　亭
抹茶を臭うおろし氷昔
餅のかをを振り出したやや　雪
ゆてれ色ものの抹ハ昼休　真
くゞく側あてお愛を切　曳
ゆゝものの相伴を活る成寺　星
ゆゝ波ゝゝ青天の蟬　愛
旗白弁病人とゝて鯛ハ　曳
亭を胴をはゝし哉　子

松の塵六章下
万世のたゝつを鵬唇を祝
黄　古をひゝへす　晋子
うゝひ安みこの茶子酢ハ渋ゝる
ちゝ和東や名物あ所梅　鹿三
船氏のけんくいゝ意むすてゝを　沾徳
物書ゝ　あゝ笠のうゝ　芝秋
隼の祭見るゝや峯陰月　周東
無地ゝいい深世子丈の葛　貞佐
てゝゝゝも畠ゝ毋ゝも神の秋　三
ゝゝゝゝて狂言弁出す　子
此句ゝけて物況あゝ伏見ゝ淺野稲荷

[illegible]の[illegible]守[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]ふ[illegible]清せ[illegible]ふ神社の[illegible]千時
なし[illegible]の菌生もり是ふ納受の力を[illegible]て
奉納の三句を扉まする

神垣や幸葺き人の笠　ゐ葉

[illegible]山[illegible]て　秋の物成

かたらの[illegible]て月の桂乃男氣ゐ

これらのすかすなる世[illegible]

臺の仏[illegible]せ[illegible]ころ[illegible]と　欧

[illegible]前乃肩を[illegible]て　洲

[illegible]法の[illegible]ふ[illegible]すや肥[illegible]　佐

山小[illegible]を出て[illegible]る市篭　池

[illegible]乃[illegible]る夜[illegible]ハ一間[illegible]ころ[illegible]し　洲

鐘[illegible]ふ[illegible]親類乃月　堤亭

霊柏へ[illegible]く踏[illegible]す鑰の[illegible]　池

[illegible]る出[illegible]ふ[illegible]踊[illegible]　欧

いつの[illegible]つ袴やゆて乃ゐ[illegible]　三

捕[illegible]野老[illegible]古々[illegible]市　佐

[illegible]千に[illegible]の孤[illegible]　ゐ

[illegible]　亭

鉄床[illegible]く[illegible]追分　洲

[illegible]て大鐘　三

[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]念な新　ゐ

夕新乃病人[illegible]て宿せた[illegible]し　池

茶苑の太鼓泰平を[illegible]

鶏の尾をうけて忘れぬ　佑子
三星却すへ也是うし上簡　佑
首とうて首ようひある氷頭鱠　佑
月黒のおもち袖糸詰の袖　安
なのるより心をとるる松ぬ月　亭
神とおもうのかよ　鳥下豆　洲
金の珠数三尺縄をうけすも　子
沙一雨　一とうり蕗の漉波　佑
信濃者京をよすしとて学そう　三
ちうへの音も腰へとくく　洲
案内のてぬくもむのる　佑
和歌のいきり波畳也きり　亭

君臣の塩梅をたすけいるれ
子葉　春帆　竹平し
あをを治もあを培梅の芽徊活か　治徒
ちはるをそれ男ようてるうし　宜雨
何とおハ杯てもあや名とり川　紆角
うとんけ乃名も接を乃柳る　止倭
負すをてちうへ言の伝うか　仙芝
祢ゆ川沙よ角ちー梅乃参　治葉
皆和とつ宮もやうなを彼岸か　朝叟
寸ぬ関を新てうはうつ伝うか　杏林
その骨乃名をうをうるいきりか　負佐
枝葉ゆて名ぬ乃霜乃ひうり計　治刈

岡野九十郎放水ちらして東へ下
ハちの如を向て
四季咲ハ牛もくいすやうなると
といひとりやんし其橋のる所
鄙を追善と沢
八橋の墓印めくるやあるのそま　周東
松寒さく旅人のゆめやうきらく　午寂
ぬやゆれ素鈴のつるを　杜若　春船
八橋で帷子の袖ハ沢色うふ　当此
ゆのとれハ橋旬ハ沢色うふ　灌木
うきうきあやめも其お月ゆり　昌貫
拾文も江戸のかうやうきうく　菜花

又病死みつくゝ元服すとなて
ハちの恋をむしの金ちつ　帆子
りちおふ一様つくゝ乃ちらゝ　琴凡
うきつくゝちをふ煮ゆム力ふ　角吁
井戸ニッハ橋のなを春ゆ霜　入松
をゝゝゝの錦を引もうきつくゝ　晋子

未二月四日
春帆寂朝
寒ゝのあをむしらくゝ乃ふ
子ちふ未朝
梅てのむ茶色もゝ死出の山

三月四日　追善　沾洸會

其芝踏るあとも雪の谷　午寂

羽乃調子て月お角ゝ入　歌子

たゝ世のせてゝ出る　晋子

塗潰に家ゝつゝめの糸ゝん　沾洸

雨のゝいさも勝差てあ　沾洸

すりて流ハ魔佛一知る狹ゝ

廣袖のゝるんゝ宿もゝ　横几

恐ッゝ　なゝゝ馬ゝ夷　餅

何乃を意ゝ　塩やゝ海士

毘巴ゝゝも為ゝゝ鷹の一和ゝ　涼雲

あゝゝゝと行者ゝる方ゝ

志つゝゝゝゝゝ　角吁

松ゝゝゝゝゝ　寄

荷ハ先ゝ海ゝとの立ゝ　日　堵岩

惜ゝゝ　鶯乃詰句勝興

仁右ゝゝゝゝ　晋子

ゝゝ　晋古ゝ

蒲座一炷香拜　沾洸

朝三章下之三吟

沾洸山ゝゝ　越ゝ

いゝ海乃家居ゝ

海ゝ引ゝゝ　昌貫

同し枯葉に杉の実の色　晋子
差圖板爰に痒からされて　琴風
山川茶王法論味噌て同　貢
入月や揖につきてる脹れ音　子
鳥驚かしてんおふかし　風
ウ　菖の実の伯父君の種しらやうを　貢
片あし都乃袷れ世中　子
千手堂一万両乃たゞ杖に　風
難より武士に成すまいより　貢
湯れ氷門に谷のひきを訓てけ　子
他にすゝせて尋るる　墨　風
樒小樒嵐と霜にやしなえき　貢

月にちく何服装篭乃僧正　子
みたさらいちの翔を灰均し　風
余所は恋常に古着ぬいうと　貢
瘦さうてつそれもくいぬ不盛　子
これそ百夜乃治郎し双六　風
捕との名にそゝるて巫呼子寄　貢
数乃何つくい南禄するより　風
売にゝくに子方の叙い闇あれや　子
はるか中に脇さしの汗　貢
下ゞる村のゐ傷まいつゝ何つるも　風
とらへつ何つゝい君ともゝの国　子
手の節はそれさへ白ゆ心和　貢

蘇秩中ヨリ出る花の紅史　風子
蓋飯の箱より出るそう紫蘇醤　貢子
[illegible]ぬるく木ぼの枝を
舟下ヨリ取立いろいろ[illegible]の刀　風子
うぶを薪よりひろひ鉈屑　貢子
氣ちがいのざんぎり石ころひて　風子
人も除目月ヨ魚河の臥元
[illegible]をかうつを戻されて羽抜鶏　子
これ雑面よりお皮切ありり　貢子
花をこの加賀咲る偽る五本骨　風子
[illegible]ちやつと吸物　子

三の蓮　八章下　晋子
志ひこしの池亭
窠てうと人ともちすふ[illegible]
髭篭おあ[illegible]
木玉より木挽よりをひらせて　東盛
牛ハらしろふ[illegible]の邪ナ　百里
裁物のない搦手ヲ月ヲし　堤亭
汚豚の[illegible]を窓のうるつ子　沾洲
[illegible]ハ足乃大指をつ[illegible]　亜子
うつ次目色ハ伊歯完ヲ飛　[illegible]
信心のきしを変して　狐亭
旅をけ[illegible]や文王の園　洲

つゝみ等一重分の付とゝけ　至
暁の箭を天の下なる　子
ちゝ皮や鮒ハ持屋小蔵る月　盤
柿を形つゝし剛力の汗　亭
内侍やう何やうたれも初めし　至
焼そつゝき蓮蝋の糸　子
花かゝ弾押小袖物なはなせて　洲
うゝしやゝ竹けゝ　椒皮　盤
温槃像おきつる方を涙れた　亭
金るを首おうつの山越　子
元服おみけおきの切ゝたに　星
ちゝやく人い捨て小むく　洲

灯の乾見物おり義出夜　盤
箸をゝして居ゝ子膳　亭
近り狂ハ人天狗元使風　星
唐米おを忘ゝハ海　洲
二おおて扇のゝて月を拾　子
おゝちゝちゝハ池略を則　盤
薮山ハ布有おゝ病を傳取て　亭
るゝりおゝるゝ口ゝ入相　洲
風ゝゝる漏ハゝゝ成ゝゝ　至
融をゝゝく水戸の塩竈　子
スハゝと訓ゝゝせゝる星ゝ失ゝ　盛
寺家ゝゝ亜安花の古石　亭

山乃槽椹ゑしりのうア　洲
墨流しあるゑのうへるる　寂

歌の詠れ　章下

志一ゆり　旅一ゆり　秋色

皮深て鍾立寒し恋の丸
歯連も〳〵しい小霜の袖笠　章子
よ石ものと早ゆうれも恵て　少水
かてゆうゑ伝のちい指　之
月のうちの葛篭男ゆうゑ　子
伏面のうさい酒臭い菊　吟
ゆうう問ま高てゆ〳〵私視　色

助三所ちゆ〳〵ゆし産ゆ　子
ゆうと四条を画て給帷子　吟
水のゆうをもとゆを和成　之
てゆやけかちりの茶屋取　子
筬广の祭世ゆい笠　吟
をしていい巻生の行のすゆと　色
天乃河助る化物の首尾　子
誕ゆし桃ゆ　ゆ〳〵ゆ　吟
ゆれゆ抱せゆすゆゆ　之
ちゆ巻ゆ花ゆ静も寸合点　子
白い歯乙せを猫之狂言　吟
あちゆくやるま喫ゆる菓子袋　子

かみ山〻 掃技めせく　之
不住の卯兵衛の時を御所　略
清もられて八枚屏きろ板舟　子
居風ろを新の卯ゑ歌うれて　色
きのうの〻仙臺の諸笠　山
歌月ゑ小袁ひ泥百久ろ寸　子
波いらせてもうのかい足袋　之
也ろ〻すのアせを掃まろ　吟
九佛の日記屏十佛の人　子
松笠ゑ臣留中歌も和ろ　之
〻あ〻あ八王味噌ゑ小家　吟
夕烏ひ一王の卯るを一つろを　子

而乃山乃〻い江戸ゑあい山　之
大第て陸本陣おて花ゑ形　吟
清浦を〻しいを掃調　子
うろの雨ゑ心の弱乃和ろ王　色
上下乃者の和ろ〻出　吟

哉の時を松魚より光ひ　掃尾
号薬ほ〻ん岩ゑ口紅粉　方橋
行王ゑ合掌戸極の糸もて　馬黒
たろ〻しさく〻ゑ金を積　晋子
月の賜ゑ小ゑ使をあび〻　橋
畠ゑ箆を浩然乃　尾

四度の家もたやすく
ひのくるりを茶屋へ連
世日れる髪の袋をかりさいを
この米屋を何の因孫
艘板よりあやぬ切をぬすと京セ
ぬくとぬしてとられるの鞠
お尺立よ三百せつけさの月
すくすれ袋演戦乃 侍
熊本い富もやく冠木門
すりるこのとき恒切を踏
舟出して花の小唄乃手拍とも
拍ちうひて お帯も舞

子 黒 尾 橋 子 黒 尾 橋 園非 寸延 黒 橋

あいは荒馬立て泊らんセ
こ輪の奉仕のもるきぬ乃
ひるれて草履上りの土のう
達ケの背 瓦灯 チサ陸
ひび行沖泥うもて雪の紅
錦帳ものに寒も形奈
石山の鐘いおもおもるの音
かるる烏帽子本性て舞
長弱さあてくれ思ひ中
かうりすくるの秋と蒼原
宵北月四方何りの張篭
ひるくりあ債も食ものも

尾 子 延 黒 橋 尾 子 橋 非 黒 尾 延

一宮より十五ケ村を服載　橋
海松ゝ初ゝ尺もの貝　非
ゆれるゝ天の橋立　奥平　黒
夕日すゝ袖も日三里　尾
幼かふ隠元　禅師一花てゝ　子
白ひふを丁る州乃焼餅　黒

家ゝ乃名江　章下

冨士長篇　枕草紙ニ海ハ鳴沢の海
とゝ有八海のてゝ下し雪吹よハのせ
られす為桑ハ帝ますへてはゝの
事なり書写鳴海の海の誤ゝ

鳴沢下数双乃奇れ衣ゝ　其裔
鶏　碁　碁ゝ狩のざゝめゝ　晉ゝ
思ふひゝくゝゝ久をあの面ゝ　来示
筆て心剪ル和ます友用　其幄
近松ゝ松尓遠くはハ見す　格技
砌　情ゝ郭ゝる菊乃吹上　孚兄
竹ゝゝの翁ハひゝ宮稲庶　る
大ゝあひ中ゝれゝ初悪　裔
悪ゝゝ子時絵帽ゝ時為ゝる　幄
ゝして流れゝ三階乃酒　示
呑料の煙ゝ子ハむ三種ゝゝ　兄
鷹ゝと茄ゝ砌浦橋ゝ結　る

ホヨとやおれてわらむ太鼓花　示

月夜乃反吐を魅乃　爵　帽

ちとりを瓶波ま勝しお酌取　齋

朝鮮人乃こゝろ乃浦略　枝

雪ゆゑ赤人の手ゆゑ　る

やましゆりもゆる胸ハ三ツユリ　齋

安部川をやこしを錦床乃ちを　枝

百ゆゑ石も鹿ま半分　る

目の下ゆゑ面ハ水ゆゑ捨舎り　示

故やりり鈎に扇あを笠　枝

栗ッゆしする水ゆを六月十ゆ日　帽

岩本院乃亭ゆ上座　兄

神奈川乃あをかてゆしの物洗　齋

くゆゆをやりを松ゆ　禪　示

時ゆゆ梁の拶拶ゆを衣て　兄

人ゆゑ人ゆゑゆゑの乃　る

沙見坂小の栟ゆま牛ゆ舌　枝

雅ゆゆせよりより名も二見晴　帽

入ゆひりかゆゆくとおや田ま　示

もゆひの袈裟も百の閑伽　齋

ゆゆゆ雪ゆ湯ゆて酒の代　る

瓦坊ゆもゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　幌

亮寺のゆゆ据ゆを花の宿　枝

四乃の絡ハ白ゆのゆゆ　兄

継目の御礼としてあるじの下官
羽塞斜出の耳ふる巻奉り
はしをとゝく古府ゝ志ゝもやと
いとく心の弱るゝみせよ音ふる
門送りの盃をとりて不忘
具雫
つゝとは南部二歳や春乃月
一種の酒ふる五百粒佐く音ふる
木犀ハ肩うつ槌ふるゝれて沾洲
潔神のゝゝ分乃鄰(バタ)の穴紫ふる
橋ト虹ト卍ふ組て晴ふり ふる
二車ゝて岩倉 松乃梁 雫

鼻も目も茂谷山乃睦鬼岩 ふる
蒐落ゝの至極凡藻 洲
小普請の鬼ふ作ゝその和ゝ 雫
指とゆびとのゝゝの交(ハヒ) 子
早追の褒美て行ゝ書 洲
唯一幕のうちよたゝて始ニル 紅
房鹿ふ五色乃餅をうゝと 雫
その遊ハ行ハ祇園を月 子
松島乃絵ふ新ゝの和ゝ乃 洲
否やもゝなゝハ沖の石舟 ゝ
花ふ拘(コヘヌキ)無乃拱(コヘヌキ)ゝてうゝ ふる
拾原の幸庚 法白を吸 亀

臥せ紅粉の色かろうして春日哉　子洲
狐にうしを門前の物　京
化けうを枯れたるも嗅ぎけり　孔
つるすめ舟やうん氣仕掛く　子
蓋をもるもの〜袁や八代賀丸　平
梟を架裟や隠居の新　洲
伊勢り鞠三条通するつられ　京
竜の尾ぶりもと上る錐　紅
鉄炮を鶏ふけかあられ　京
宿をかるもとかいつを十月　洲
一葉〜兎の弓をうたるる　京
猿りみられ斑きまむ松茸

八十島のもくめを拂る毛蟲　孔
藻蒲團をを注蛍ばるる　平
手力雄大飯くをを守りあり　洲
この時出所　千年新音　京
錫引の光を花ゆうの影　子
つるを通りもも苑のうるる　孔
槽座のすくとりけるる
檀泉とたるる

爰をもむ世後ちつく祖代守　晋子
鶉や松を一すもと考うう　檀泉
菊の同をかう矢筈を昼ねか　沾洲

小車おいつくるものの露拂　第五
檀象り鹿丁しるる
鳥をしをしをこれをハ江戸有　其雫
一章のうるはし秋天万星千帆
漕もとゝのふるるる
初霧乃しつるや櫂ハ強風舟　雫
二日の月ら朋肚脇の耳　五
宍門乃ゆくハ酒もり拾ふ　仝
一ゝを巡領ハ供せられて
象涙の岩を削るや神の宮　泉
蜻蛉や日ハてりわ活物　五

星居　十二章下
あるゆふ神又をと半て流ふり
ちるもの人の手ハてとりてをを
星をつるをををれをし
御溝葉ゝ忘れおるや　悪人中　竹之
七百足　神ハ移ふ敷ハ　貴子
素遠ゝ月乃ハ居る角家で　駕士
ゝゝゝ媛簫声ゝて呼　幸倫
焚を鳩　蒲と中せを　都　し　為此
ゐの中の考ゝ柳ゝ柳ゝる　之
庶乃ゐる殿ハ亜れて公いゝ　る
目ゝ乃ゝ乃ゝ蛮のるまい　士

保乃久と後よたまつの比石間　倫
昭子ハつ光ハ拾得ハて　吟
ぬ子ハ目ふつれ〳〵て我ハ雪　主
祝宴たなり色りお袋の側　子
かもゝと拾つけける蕗乃皮　ゆ
夕沙見して神楽舞する　士
流矢の勇ハこゝて馬乃尻　子
つまなり蕎麥やいけぬ徐蘿匐　意
つまゝと初章祝年雨の足　倫
ハ呂のを合ハ月乃金札　ゆ
秋ふたを諸行元常も大歌構　士
なれ可ゝい綾のおす色を　倫

大壽乃反亀ゑ花乃宝　子
十八町ハ滝〳〵曲乃　主
給ゑて禁野ゑ鶴の記相ゑ　ゆ
いゝりの茶向されたる者　士
よび生ては勝よかる五ツ衣　意
すく里國ゑも注ゝ猴し　倫
淵ゑゝゑ鼻ハ奉書の作りつけ　士
重頼の色ゑ決　子
獣物ゑさゝゑ岩城の月の友　倫
ちれてたゝゑ蕨の保章　吟
兎のゑ歌ゑ入て糸りゝり　ゑ
むゝちゝの五智の假菁　主

[illegible]

沉の海[illegible]を神[illegible]すれ　土

氣霧てハ船をおもを守る異の陀　主

猶りとゝ岩[illegible]宮守り　導　輪

一　捜る天の羽袖を五合斗　吟

大[illegible]志[illegible]巻向乃山　土

入れの為[illegible]さん[illegible]をりて　輪

捜る吐せる文り知し　子

白[illegible]ハ二[illegible]襟りて[illegible]ハり　土

竈神流せもやで其[illegible]　主

雉の尾[illegible]枝を溝し[illegible]　輪

[illegible]ゝ[illegible]ゝ紫斑袖を捜る　子

篇外

三弄翁の食鑑より鵝鄙　布久と訓ル古ハ布久閉とゝゝ云り腹脹して恐る波の上ゆ[illegible]ゝ形をゝ[illegible]三平二滿すてけ[illegible]口もとゝ[illegible]斑虎の前といふゝ西施乳と比して雪の夜の衾をゝ[illegible]むるこを楊家の獨ゝ[illegible]者らとて[illegible]ハ鵝文人ゝ盤とゝて分[illegible]九芟三冬の親炙近来の上達

醫師の口ゝ[illegible]ゝいを[illegible]

茶の湯ゝハ[illegible]瓢汁　晉子

鉄炮ゝそれとゝゝ雉汁　仝

[illegible]庵の舎[illegible]の接穂の木乃
[illegible]のいとふ暁笠亭[illegible]者を集り
夕商の[illegible]をして[illegible]
[illegible]例の謀叛なとすゝもるハ
閑居不善の色敵なと音[illegible]塞
一方の連[illegible]ハ[illegible]亭坊の
腹立ハ醒て[illegible]

檀泉

難けや米買なとゝ假[illegible]
[illegible]を木末なるれ一斤　沾洲
[illegible]の舟[illegible]車をゝ[illegible]せて　音[illegible]
[illegible]て玉[illegible]　丈松
[illegible]て初[illegible]　真佐

切[illegible]て西八田乃[illegible]せ　泉松
一すゝ[illegible]の鼻[illegible]めして　[illegible]
切[illegible]吐血三代　[illegible]
熊坂と五五中ゐいへ[illegible]　泉
大根ハ[illegible]す煮る榛の木　依
[illegible]倉ハ梓の[illegible]れ水[illegible]　洲
籠てかゝ[illegible]る茶筅何束　指雀
塗樽[illegible]　[illegible]
物よ[illegible]を[illegible]入し　洲
陵れ[illegible]て八百の安の川　松
名とりの老女殿ハ盗　泉
ちと入[illegible]乃なけわの白[illegible]　[illegible]

昨の降るしに着到ハ洲佐
路中なる　ねぐいて晴る春の山　泉
ひりい乃外ふるし定小屋　松
投見よ雨ふるもかな　鶯　佐
稼ぎ　土産ゑ　洲
是やかの義経様よりの忘んゑ　ゑ
階ゑ　ちつハ面乃ゑれ　佐
伊きけの　ゆり　食　松
大三挺　ゑ　蓋の忘ゑ　其幅
昨今にのゑるゑのゑゑ　泉
桂きひ　きも　ちぶ　とゑを　松
舌かぬ心　ゑ心ゑ　ゑ月　幅

悠ゆくして花みべカコウ　洲
鈎の忘蓋をゑいていふく　佐
門ゑ多ちほくゑ六ゑれまつ　泉
佐曼陀羅ゑれとしも二百両　ゑ
駕籠のいやゑ生きとこゑ　幅
矢念ゑハ情い面ちゑ　洲
ゑしめゑ　松
ゑ花滝ゑ醉ゆ
先ぱをこゑの忘ふ河豚汁　丈松
ゑの月沙さい涙も　契ゑり　五出
初鈎や弟ゑの蜜ゑ物　其幅

柿之給　一休和尚自讃

冠屋公の奇品にて晉子古筆を
噛て種の一つをあらはし中し
ゆうもの手其気質の稟たる
ひとしらぬ所をもとをとを
もに病僧を以て見あてうし流し

東潮

もちまして知へやうに　柿　俵

まゝ撫まする秋を山人　晉子
有明の鐘つき賃を催しあり　青峨
嬲乃ちり中舟もてあるる　双魚
菊翁のさしに史乃ちあり　大舟

むらゝ雨ゝ乃詩は辛ト影　潮
瘰癧の笠ゆめそよ柳の子　子
いのちさに蝶乃口もと　峨
春を世ま止やすしの松ゝを　魚
遠乃も所りて城乃塗ふ　岱
千歳を膳のすくひのすくひる　潮
五間つ宵ま西日時雨ふ　峨
年寄ハもゝひつゝの木綿坊　岱
うゝ也軍と涙ちゝつ　子
偽山の心より乃れを剛毛を東　魚
宜祢ゝゝ見しよ負りゝく巫　潮
貝焼お月雪花やすをあ　岱

奈良をつとめてやまぬ清洲(ミツハナ)　嵐
小袁具乃あをあらはを干てこれこ　子
安月もさはする出の帆柱　魚
水増ハ宮古のをはうさためや　湖
神らんの着(ツキ)子のハ合歓の木　球
蛸なんと腹ふくされに任せより　弥
大仏秘薬乃補(キ)腕を取　湖
達广寺ニ馬のはしる雨やどり　魚
かいご参乃秦袍む　子
糸仙の膠付(ケ)かぬる　ゆきゆき　球
一くゝりても祈状はし沙　嵐
江戸者の伊勢乃灯一月白し　魚

かた涼淵瀬を色越への秋　子
桐情とはり落なれて切情を　湖
豆をくいうかそうる味噌播　盛
柏子木ま左右をならてくれをとり　嵐
蒔絵乃浦の節白鯖さ　魚
名酱の座蝿(ハエ)名が毛の咲　子
井みずう里乃秀をきみ表　筆

金扇のをしまうちもの浜
大津あ松本の牛も休めて　晋子

皿
鉢よ鉢乃流あけや心を
漁父よまいうし澤深の風　貞佐

假寝の途に花天暦苔むす仙窟
元年八月長安を発し沽洲
所縁の月推量の場もあるべく横尺
上蹴うしのけて蜀黍の真子
"義田姫皆"鍬て拵てり依
羊羹をくく敷皮の空嘉
ようかんを口中腫す火の如し洲
ひらひ買て寄る岡持几
逃ひると泊"宝"酒の酔子
飛ぶ井紅をあれ林の墓洲
の中物さ金の封切ると尻几
枕元度ぬ名ハあく世月依

新ぶ目ハさやうみ骨掌痛嘉
原田次郎う袖い世乃高子
あの赤を物相飯も百人一首洲
お湯桶おてハきくけるる几
講中ら已に已夕ばら五子
通詩をくく故に沼洲嘉
内この偶偶ずをよ赤錦夜思佐
けの色瘧ゆと考て悲る洲
顚まて敷るハもを思司の几
顚て初むるハ水乃蟾蜍子
大宮を天竺とよ月見しる多嘉
陽ら引頁乃廂一本依

掃庭ゆ識流れ出る篠絹洲
ゆ一山醤〳〵雪車の鉞ゆ凡
袴の血をもちごくいりみ相拠仏
狭を素袍をいつのさめ〳〵藩
屏風切初めもろハ立てめて子
股のきこりをいとゆ濃つし仏
留守居股朋遠方ゆ〳〵さらり仏
俵ゆきる箭の脊情むを洲
塩竈の縄をゆらけを干浮きく仏
千とせ乃坂をゆ〳〵浪坂子

漢家謫居の人を弟卯画て世の弟ゆ
ゆ〳〵を忘れるを益てゝろの散乱を
きゆゆを原のたてゝワゆ〳〵浪せる相
千金ゆもゆ〳〵すとゆ沢竜の自畫ゆ自ゆ
流〳〵ゆすけ舟とあるを子ゆ〳〵きく
ゆ〳〵る名物し鎧合の一るゆをれてくゝ
如るゆの何ゆゝと浪くゝ〳〵の日記音
しての一風流をゆ沢甲ゆろゆ乃ゆ
ゝれゆ舟のゆゝれゆ沒ゆゝる者
何を路むろて茶をゆ沢て浪面ゆと
俗ゆ白ゆゝの袖乃浪面とゆゝ甲
捨ゆゝをゝり

新月の影ほのかなるを便りなる　楓子
昼は自餐を藤の生　晋子
海辺の風雪に堀せられて　岩翁
名乃あり所固に玉をれて入　暁白
他国者、櫓なしの舟うきに次第　大町
あかつれるものふ松はしるく　なる
初雪のさらるる求めて拾うを　扨即
切竹一臺をもこらも四ツ限　堤亭
はれ言くは筆むつくしきの声　昌貞
占なもあらしは水の浮判　秀風
海山木のまはつもはるつく　紫石

内蔵宿を江戸を古郷　反梅
世中を庄八の目まくらし　晋子
二枚の荷の乃を寒を松　楓子
仏とは大髄ちりをつつ立て　止水
ふもこりやむとすてを　昇進
鶏をうしろい狐をつをを菊　其平
ちらい狐をつをを菊　大町
旧祭の荒をとられて秋の月　暁松
をめるようて配り上下　岩翁
ふふて士農工商さやは　其平
雷を呑いをくうる　紫石
山吹を　秀風

何を畫けばかんさーの蚤　昌貢
別れの土蔵て泊る暗闇と　堤亭
汐原とくしへも吸物を嗅　止水
逆刺も夜の錦とつのやる　岩翁
女を　ぬくもり　おとこ人形　音子
ほくろんの〜〜ゆるきぼる大指の血　及梅
地蓋を　挺　白　拂ひ　咬松
豆鱶の塩辛　て　月の沼　紫子
どこそのもつ　仕　人　琴風
ちのもちよつと　稲荷を　止水
撫よくしぶ　袖のもくみ　楓子
箱根沢を血入階のしちひ　音子

田中の　乃すわむ　傘　生
きつの世を尾ひれ　氷鄭　昌貢
付受　ちみを　看　大町
栄想ちる　あり　腹の　生
生やしの骨　京色の　畑　扇郎
揮庚の　れて　鯉　琴風
ものうひ形　ぬくの　岩翁
別要よ頬　冷せ　堤亭
数　溯　ちよつ　橋　山水
ちて目ハ　小脇差　琴子
ての輪　の手　恵　咬松
故参のつ　ない　を日　向　大町

陸地へ賽を賣囲碁市　昌貢
大釜の八あれをしる蛇の玉　晋子
ほ生とくてゆる引出の衣裳　楓子
三
那須黒もおいはなく明川　雪吟
人々何ともなく日の　移節
夕はうり母袋さいし兩舎の　堤亭
尾のあるゆ先牛房をし　長枝
吐といふ主のゆるも山下風　晩松
路ると男を物取てあるを　岩谷
切者ある窮乏まふ笞をる　止水
切籠のうきなかまる蛸刺　晋子
宵の月産てくゆ子娘と八　楓子

相談の場をあめ世ゆうろき　雪吟
山側ハうれ寄重のあるうる　大町
十里を行も様おの足　昌貢
百姓の人弟侍技助の雪の下　移節
なりとなるハ廣に制礼　啓谷
三月
うちうて伊豆のみ山の花をて　楓子
雨の稽古新うり俳うつく　晋子
うくとてゆる盲八罪なる　止水
五人うり行ゆ世八来る　友梅
赤毛月袖よりゆく眉銀る　移節
吾妻のみちをうしの本より　昌貢
冷酒うう年世の女と鳴戸繰り　大町

腫物 苦るせ目前乃鬼 [illegible]
三方の底うちへ [illegible] 琴風
和尚の使宜 [illegible] 長 [illegible] 唖松
うゝ鉦を踏む町屋の [illegible] 宕谷
罪なうゝ [illegible] 秋郎
咲乱をりとよ〳〵作の鞭 止水
むかのゝくい三すのお伴 境亭
うゝのすゝ舞の中入りのやし 大河
鞠市篭よゆゝく [illegible] 琴風
り列も杖つき坂いをのつゝ 昌貢
口相手まハのゝね其阿他阿 桃子
脳ちすてうへ [illegible] 岩翁

どちゝう拂あに大親乃首 唖松
六尺の海うりせて喰氣て 琴風
お涙下 譯 [illegible] 石摺 昌貢
京宿の灯 [illegible] 境亭
ひとあ二 [illegible] 食乃氣 晋子
裏ゝ中花へおて [illegible] 桃子
丁を隙日と丁のおゝ [illegible] 秋砂
角町のゝ下 [illegible] 岩翁
ゝ [illegible] れて [illegible] 止水
奉幣使何もまゝに 鈴郎 唖松
帆 [illegible] かゝる三尺の海老 境亭
つれゝの [illegible] 古摺筒 琴風

かゝられうつくしき錦の間の富士　大町
屏風合よ勝てなをしがたうし　晋子
二六對なるの小向乃　毎　桃子
花名の改元觸てを笠山　昌貞
旗宿も南る曲水の　辨　井己

右巻〻文類の大意をつけて引合せ
精稿すへきを用光お犯ちゆへ
寒暑心勞〻ちくて雑篇一冊ヶ
略〻作り掌舒讀考の序各其
けるゝて弁ゆるゝへきものし

昔紙の巻物あるしを宗祇法師の門の
あるて作れ作り作られてくよみ作られ
ちゝのしつくかちくはをとあるし
文義を感通せられしまやうのまくヶ
分部ようて別の詞書をてくれり
定家卿の序書るを宗祇の丸題を代をかる
かゝる名物を拾くちもひかゝ
元禄十五年壬午

聖廟八百年御忌　西行上人五百年忌
宗祇法師二百年忌　貞徳翁五十年
一潤月十五日懐旧の心をのくは作る
帯解も元をちゝれの昔か　晋子

かの古沢丸のすゝめて昇殿ありし音を
いとるゝし夢想を祝し侍る會盟のるゝよ
つけて才士文人筆を墨にしてもし其
名言字人の意忘るゝ合はるも風俗
おゝゝゝに花梅のゝゝゝ変ゝもへまゝ
あゝゝと

晋子

松梅や百ゝゝある年を八百所

亀井戸千句奉納発句略之

荒木田守武獨吟誹諧千句之奥書

右御猶ハ天のゝゝ独吟の句立発ありゝれとうち
紛ゝ亦ハ成ゝゝゝ色けも立たゝにゝめ
せんの余りゝ伊園を取へゝふ一ゝもとより

二ゝゝゝ御猶の句略るゝみて長二ゝゝゝゝ
命ゝれ七二ゝゝゝ世有猶ゝ侍りふく大るゝ千
句ハ三日ゝゝハ是ハゝゝゝハ二日ゝゝゝゝ
思ひのかゝゝゝゝゝ秋ハゝゝゝゝ俗し庚申
ゝハ二百韻ゝて五日ゝゝゝゝ其ゝゝゝゝ
ゝゝん間往ゝゝゝ式目いゝゝゝ都ゝハ
いゝゝゝゝゝ目ハ手ゝて宗ゝゝ
定ゝゝゝ用ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
体言私ひれる心胴一句彷彿ゝゝゝゝ
ゝれとゝゝゝゝの中れきハゝゝゝゝ但を
ゝゝ扱ゝゝゝとてみゝゝは笑ハせんとゝゝゝハ

ゆく花実を留め風流のてきつも白正く
ぢておしく何んやうにと世の好士のを〳〵
かるは千句八吟れをもとちかひとく満ふ
一念ちりよ春秋二句結ひ〻も和もをぬし
されとも正風継人の耳にも入まとは弥を
ゆしんはちり〻ぢる幸ちんや其上粉骨砕白
ちきの〻もあり〻ひ又さ〻ひも時代あるる
五ちあやきあてをさんも熟心ゆく有り
拙れと弧僧何ものもあき跡形はとく好ま
ぢる方の云種あれと何ら又世界去ちんや
お遠無よ嘉ちゆ〻ちる安大事し本連歌
兼載てのこあてく心ものひ他念あ行ちて也

庭を必ず催し庭名帰〻つなみ尚也
笑をなん也舞入ぬ一橋を口ち宗碩八文
ものしの自讃ま入おのゆをを掬ちさし
宗祇ちり〻く数自れとり仰り近くハ
宗牧一三座忘れ〻〻らを名ちよて
思ひあるち仰るし追加五十韻おほれと
祇公三吟よて千句二折を思ひもる和ちし
さて古来まれある猶ゆ千句成就松の葉乃
西木のう〻月出ぬや仰ん
これを勢刀山田の住反朱子ちもとを右の
真改あるを原免高を〻て弥ちゆ
写仰ぶ〻